



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成 15 年 2 月 25 日  
通巻 30 号

## 第 11 回下水道博物館情報交流会議

### - 報告と日本下水道文化研究会からの提案 -

本会がかねてより開催に協力してきた下水道博物館情報交流会議が1月16日大阪市市役所で行われた。参加自治体数は8と決して多くはなかったが、いくつかのテーマを決めて議論の場がもてたということで、情報交流の場としての機能を果たしていたように思う。従来議論は、展示等のリニューアルと施設集客力の向上が中心であったのに対して、今回は、教育関係への働きかけ(教師に対する学習支援策など)、NPOとの協働、今後の会議のあり方なども取上げられ、それぞれの議論も活発に行われた。本会からは、木村副代表と酒井が出席し、酒井が「下水道博物館のさらなる発展に向けて」というタイトルで問題提起及び本会との関わりを含めたいくつかの提案を行った。

この会議は、1992年に開催された本会主催の「見える下水道にするシンポジウム」で採択した「見える下水道にする提言」のなかで提案され、今から10年前に始まったものである。この提言では、下水道から住民を遠ざけ、処理責任を専門家に任せるばかりではなく、水環境改善のために住民と行政が協働することが大切であり、そのための拠点として「下水道博物館」の必要性を訴えている。そして、見える下水道にするために自治体が情報交流を図ることを目的に本会議を提唱している。本会はこれまで主として資金的な支援を継続してきたが、10年間継続されてきたことに敬意を表するとともに、本会の助成金を主とする活動支援は有効であったと考えている。但し、近年は参加する自治体も減少傾向にあり、会議での話題も、何度か参加させてもらったときの印象になるかもしれないが、展示が古くなり入場者減ったけれども予算がつかない、このままでは入場者はますます減ってしまいかねない、いい知恵ありませんか、ということに尽きていたようで、マンネリ化の観はぬぐえない。

そうしたなかで、今年上記のような議論があったわけであるが、議論のなかで出された話題などをいくつか紹介しよう。教育関係への働きかけでは、大阪市から、下水道科学館と教育委員会が小学校の社会科及び総合的な学習の時間に役立たせるために作成した「学習プログラム」の紹介があった。また、中学・高校への働きかけについては、事例が見られていないが、上の学校に行くほど自主性が大切にしなければならないので、職員を派遣しての出前講座などで興味・関心をもたせ、そのなかで下水道科学館を積極的にPRしていったらどうかという意見があった。NPOとの関係に関しては、下水道広報ということではいくつか協働の事例が紹介されたほか、滋賀県ではNPOへの管理委

託も考えているとの報告もあった。ほかの分野の博物館では、ボランティアが活躍している事例は少しも珍しいことではないので、是非協働の方向を検討してもらいたいと思う。今後の会議のあり方では、(参加者からではないが)10年が経過して役割は終わったのではないかという意見もあるとのことで、従来どおりの情報交流から新たな展望を持つ必要性が指摘された。このほか、情報交流ということは普段から必要なことで、そうした場をインターネットを利用して設けてはどうか、不参加団体の意見を聞くことも重要なのでヒヤリング等を行う必要があるという意見も出された。

また、下水道博物館として3月に行われる水フォーラム関連イベント「水のエキスポ」への展示参加が予定されているとのことで、本会からは、各下水道博物館ばかりでなく、情報交流会議の発足とこれまでの経緯の紹介も行ってもらいたい旨要望した。

最後に、本会からの要望と今後の日本下水道文化研究会の関与について当日提案した内容を紹介しておこう。

会議の結果を全国の自治体、関係者へ発信することは是非行ってもらいたい。(議事録の作成、研究発表会・広報部門での発表、ホームページのリンクなど)現状維持のための「情報交流」から脱却するため、「見える下水道にする提言」の趣意再確認が必要。

「提言」の主旨から、多くの自治体からの参加を募り、会議のメンバーを広げてもらいたい。

下水道事業のPR館からの脱却するため、下水道博物館のあり方を議論する場としてもらいたい。下水道博物館の必要性は会議発足時よりむしろ高まっているという認識のもと、下水道博物館に関連する事項(博物館の動向、市民への情報伝達、市民との協働など)を学習する場としても位置づけてもらいたい。

今後の下水道博物館情報交流会議と日本下水道文化研究会との関わりについては、逼迫する本会の財政状況のもと、資金的支援よりもNPOとして交流会議の運営に知恵を出したり、下水道の広報に対して政策提言を行ったりすることにウェイトを置くべきではないかと考える。そこで、これまで日本下水道文化研究会はこの会議の運営・企画に関与してこなかったが、継続的な企画提案などを本会が担ってもよいことを申し述べた。一方、下水道博物館を日本下水道文化研究会の活動をPRする場(刊行図書所蔵・展示、これまで作成したパネルの持ち回り展示)としても考えていきたいので協力をお願いした。

今回は、名古屋市で開催されることになり、この会議を発展させるため、ほかのイベントとタイアップさせてはという意見もでた。いずれにしろ、積極的な協力を維



## し尿研究会報告（第17回・第18回）

## 第17回し尿研究会例会 報告

昨年 12 月 13 日（金）午後 6 時 30 分より、東京・飯田橋の東京ボランティアセンター会議室において、広瀬祐氏（西原環境衛生研究所）から「有機性廃棄物のリサイクルと農業利用」と題しての講話がありました。一年ぶりの会員外の方からの情報提供です。広瀬氏は、社が経営する実験農場（北海道鹿追町。昭和 48 年開設。屎尿汚泥、下水汚泥の農業利用への実証試験。）で長らく責任者として、圃場整備、施肥管理、データ整理を行う一方で、有機性廃棄物の利活用についての研修、交流、普及啓蒙に尽力されてきた方です。ノー原稿での 1 時間余にわたる講話は、体験に基づいた説得力のある、それでいて浪漫に満ちた話でした。話の骨子は次の通りです。



鹿追農場

開設から数年間の施設・設備整備の苦勞（「自然から得られたものは自然へ」の考え方を徹底的に教えられた）汚泥散布用の農機具の改良・開発（これが現在広く普及している）農場管理の合間の晴耕雨読（その後の研究発表やセミナーでの講演に役立った）JICA 研修で 50 数ヶ国約 500 人近い研修生が鹿追の農場を訪れてくれたこと（視野が広がった）下水汚泥資源利用協議会における啓蒙活動ローコストでのコンポスト化の確立（「資源化製品の需要や流通は利用者が決める」との考え方が必要）海外を視察したことを踏まえての比較検討（品質基準の必要性、バイオマスの生産の奨励）地球温暖化防止に対して、有機性廃棄物の資源化がどのように貢献できるか。

## 第18回し尿研究会例会 報告

1 月 30 日（木）午後 6 時 30 分より、東京・飯田橋の東京ボランティアセンター会議室において、長谷川清氏（本协会会员）から「下水管の清掃業に転身して」と題しての講話



長谷川 清氏

がありました。長谷川氏は、現在（株）カンツールの社長を務めていますが、15 年以上乳業会社のサラリーマンを経験した後、管きよ清掃業に転身された方です。この間の経緯、転身後の苦勞話、管きよの維持管理への熱い思いなどについて身振り手振りをまじえて語っていただきました。講話の骨子は、次の通りです。

10 歳までロサンゼルスで育つ。その後、親とともに帰国、東京に在住。

終戦の年に赤紙招集。

大学卒業後、乳業会社に入る。

昭和 40 年、40 歳で下水道界へ（亡父が設立した、下水管の浚渫機械を輸入販売し、かつ清掃作業を行う会社を引き継ぐ）。

社会の縁の下の力持ちに徹することを決意する。

ビルの屋内排水管の詰まり、駅のトイレの詰まりなどを解消する作業を見て回り驚愕。

当時の下水管の清掃は、バケットマシンや土木用ウインチと鉄砲で行っていた。

清掃機器の輸入先のアメリカに行き、管きよの維持管理のノウハウを学ぶ。

昭和 60 年頃から、管きよ清掃の歴史が長い欧州を廻り研修。

昭和 47 年、アメリカのダラス市で、「下水管の埋設時期、材質、管径、スパンの長さなどを記入したカードを使って管理していること」を見て感心。さらに、手作りの TV カメラで下水管の内部を撮っていたのにビックリ。

さっそく、国産化に取り組む。TV カメラ調査で管きよ内の様々な情報が得られることがわかった。鏡で見る時代には考えられないこと。

昭和 50 年、高圧ジェット水での清掃法が出現し、バケットマシンは後退。

管きよの管理についてはなんら明確な記述がない。人間はとかく目に見えるものに対しては騒ぐが、目に見えないものに対しては冷淡である。

昭和 56 年、下水道管路施設維持管理研究会を 18 社で発足。

昭和 62 年、下水道管路維持協会を発足。会長を 6 期 12 年務める。

平成 6 年、社団法人として建設省の認可を受け、（社）日本下水道管路管理業協会（会員数 320 社）に。

（地田修一 記）

## し尿研究会第19回例会ご案内

演題 「江戸小咄から拾った便所と屎尿」

講演者 栗田 彰氏（東京都下水道局）

日時 2003 年 3 月 15 日（土）10 時から 12 時

場所 東京ボランティアセンター・市民活動センター プラザ C 会議室

電話 03-3235-1171 新宿区神楽河岸 1-1

JR・地下鉄 飯田橋駅下車徒歩 1 分

栗田氏は、かつて落語に出てくる地名を拾い出し、現場を歩いて「東京落語地図」をつくったことがあるほど、落語に造詣が深い方です。落語には江戸小咄が元になっているものが、けっこうあるそうです。今回は、便所や屎尿が関わっている江戸小咄をいくつか選んでもらい、それぞれについて解説してもらおうとともに、江戸時代の屎尿事情を話していただく予定です。



## シリーズ・博物館めぐり（第1回）

稲村 光郎（本会運営委員）

近年はどこへ行っても、郷土資料館を探すのは難しいことではない。木造の古びた、旧町村支庁舎を利用したような暗い建物であっても、よく見ると不思議なものや、「えっ」と思うようなものが存在したりしているものである。学芸員らしき人がいて、説明して貰えるならば立派な博物館である。何も無いのではと思っても、例えば故岡並木先生が一昨年の総会記念講演で紹介された「足半（あしなか）」を「わらじ」の展示中に見つければ、それだけでも収穫があったような気分になるというものである。

残念ながら外国の博物館には、それほど縁はないが、聞くところによると欧米のそれは公私併せ、非常に数が多いという。わが国でも下水道博物館のように各分野で公がもっと力を入れ、企業系の産業博物館を含め、いずれ郷土資料館と同様な広がりを見せて欲しいと期待している。

博物館に関する書籍は非常に数が多い。観光ガイドブックにも結構載っているし、インターネットでは、各館のHPにつながる案内サイトも容易に見つかる。だからと言って、それですぐ見に行きたいとは思わないのが普通である。そこで3冊だけ紹介したい。第一は「おススメ博物館」（小泉成史・文春新書）である。著者が恣意的に選んだ50の施設が紹介されている。次号以下で紹介する博物館ともダブるであろうが、独自の評価がなされているのがいい。第二が「近代科学の源流を探る」（菊池文誠・東海大学出版会）である。これは表題通り、理科系の視点から書かれた欧州の博物館ガイドである。ヨーロッパで半日ほど余裕があれば、立ち寄るのに参考になる。半日では時間不足の施設も多いが、後の楽しみであろう。第三に「遙かなるスミソニアン」（松本栄寿・玉川大学出版会）であるが、これは案内書ではない。横河電機の企業博物館設立準備のため、担当となった著者が留学し、米国の博物館事情を調べた、すなわち博物館側からの思いを込めた本である。

筆者自身は、酒井代表から本欄に書くことを勧められたものの、博物館に特に詳しいわけではない。またそれほど通っているとも言えず、「おススメ博物館」の紹介する施設には、半分も行ったことがない。それでも紹介を敢えて書こうと思ったのは、博物館には何か発見があるからである。たった一つでも面白いものがあれば、それだけで十分だと思っているので、余り失望したことがないが、その中から幾つかの博物館を紹介してみたい。

## 第1回 夕張市 石炭博物館

石炭博物館は、大牟田、田川、宇部などかつての産炭地に幾つか存在している。また鉱山にまで範囲を広げれば、別子銅山や生野銀山などにもあるし、秋田大学鉱業博物館のように鉱石のコレクションが素晴らしいものもある。その中で、夕張を挙げるのは、そのレベルの高さもさることながら、筆者になじみがあるからである。母方の伯父が北炭夕張に長く勤めていたこともあるし、学生時代に夕張出身のユニークな友人にめぐりあったこと

もある。北海道の大学だったからであろうが、炭鉱関係者の子弟も多く、中には高校卒業後、炭坑で働き、学資を貯めてから入学してきた友人もいて、都会育ちの筆者などはその経歴を聞いただけで圧倒されていたものである。

この博物館の最大の特徴は、過去に実際に使われた初期の坑道を利用した動態展示である。人形モデルを用いたツルハシ作業から大型採炭機までであるが、特に見所は超大型の採炭機が並んでいることであろう。それがエンジン音を響かせると、落盤でも起きないかと、一人では心細くなるような臨場感があり、閉所恐怖の人にはお勧めできない。外に出てほっとすると、高さ7米の大露頭と称する石炭層の崖を見ることが出来る。また遠くにズリ山（北海道では、ボタ山とは言わない）と炭住（炭坑住宅）が見え、高倉健、武田鉄矢の「幸福の黄色いハンカチ」の世界である。

動態展示といっても、エンジンをかけ動かすだけで、実際に採炭をするわけではないが、静かに余生を送っている感じの展示品よりはるかに生き活きとしており、機械といえど生命感が溢れているという印象を受ける。

このような坑道の展示の他に、本館展示室、機械館などがあり、関連の設備機器や石炭そのもの、石炭といっても様々で発熱量や灰分など千差万別だということ、を見たり、知ることが出来るし、液化など最近の研究成果も示している。このような専門に特化した博物館には、全く内容を知らない小学生から、リタイアしたプロまで訪れるので、展示には苦勞すると思われるが、その点では、おそらく成功しているのではないだろうか。

また周辺の徒歩数十分の範囲内に、坑口などが点在し、北海道の開発と経済を支え、戦争直後には黒ダイヤとまで呼ばれた石炭産業の夢の跡をたどることも可能である。

施設は、正確には「石炭の歴史村・石炭博物館」と言うテーマパークの一角にあるが、石炭博物館だけに入館することも出来る。別棟に炭鉱風俗館なるものがあり、炭住での生活など民俗的な展示があるという。地元の人たちに郷愁を呼び起こし、親しみを感ずる点からも、そのような工夫は必要かも知れない。

夕張市は、毎夏「夕張映画祭」を開くなど、観光振興策に努力しているものの、このテーマパークの入場者数を見ると大変だなと思わざるを得ない。博物館も大丈夫かと心配である。



大石炭塊

北海道では、近年「町おこし」の一環として、あるいは町のルーツを再確認するためでもあろうか、美唄の「炭鉱メモリアル公園」など旧炭坑施設を近代化遺産として見直し、活用、利用する動きがあると聞く。本年 9 月には、わが国で初めて「第 6 回世界鉱山歴史会議」が、赤平で開かれる。ドイツのルール地方など、世界的な炭田地帯と肩を並べられる高度な設備、機械が、残っているのだそうである。それらがむざむざとスクラップ化され、消えてしまうのは残念である。夕

張の石炭博物館も、その存続と内容の充実のため、多くの人に、一度でも行って頂きたいと思っている。

札幌から直通バスも出ているが、アクセスは多少不便である。しかし、夕張メロンの、型は悪いけれど、非常に安く買えるのが魅力である。

案内は以下のアドレスを参照されたい。http://www.jria.or.jp/jria2/industry/museums/hokkaido01/00.html  
注：炭住については解体が進んでおり、今後も見ることが出来るか保証しない。

## 日本下水文化研究会関西支部の動きについて

木村 淳弘（本会副代表）

日本下水文化研究会関西支部が発足から約 10 年が経過し、その間大阪府主催の下水道フェスティバルに参加、日本上下水道コンサルタント協会関西支部と共催して夏期講習会、環境セミナーを開催するなど、また、2001 年の世界湖沼会議に合わせて津市で開催した本研究会の研究発表会への協力など、活発に活動してきました。今回、10 周年を迎えるに当たり、更に関西において本研究会の活動を活発化するために、関係者が集まり協議しました。（2003 年 2 月 7 日、於：大阪経済大学、出席者後述の 8 名）

先ず、稲場関西支部長より発足から今までの関西支部の活動状況の説明があり、「10 年を迎えたこともあり、今後の関西の研究会のあり方、活動方法など再検討することは有意義である」との話があり、これお受けて自由活発に話し合いが行われました。主な意見は次の通りです。

- 関西圏の会員は約 59 名であるがやや少ない。名簿を見ると更に入会していただける人があるのではないか。
- 関西圏の会員は研究会、講演会に出席できず、機関誌、ふくりゅうを読むだけで不満に思っている。
- 他の関西圏の NPO との連携も検討し、幅広く活動すべきではないか。
- 会員の中に講演、研究会で面白い話ができる講師もいるのではないか。
- 大阪府のフェスティバルへの参加は PR 効果もあり、大阪府が開催する限り続けるべきだ。
- 関西支部でも会報を年 1、2 回発行したらどうか。
- 本部からの 8 万円だけの運営費では苦しい。金のかからない方法を考えたらどうか。
- 水に関する、特に排水に関する施設等の見学会を開催したらどうか。
- 新運営委員には京都、神戸の委員も加えるべきではないか。

など、多くの意見が活発に出て、喧々諤々の後、次の結論を得ました。

10 年を節目に現在の関西支部の運営委員会は発展的に解散する。

新運営委員会は本日の出席者を主体に中川広氏（日本下水道新聞）、勝矢淳雄氏（京都産業大学）を加えて発足する。

新関西支部長には木村淳弘が選出された。

稲場紀久雄前支部長は顧問に就任する。

京都、神戸の委員については後日検討する。

今後の活動については、次回の運営委員会で各自アイデアを持ち寄り決める。

本年度の行事の内大阪府下水道フェスティバルへの参加を優先する。

次回の運営委員会は 4 月後半（人事異動を見て）開催する。

今後、運営委員会は年 4 回（春、夏、秋、冬）開催を基本とし、その他、必要に応じ開催する。

今後は、活動方針を「水環境を、水を捨てる観点から、その文化、歴史的背景を踏まえて、考える場として研究会関西支部を位置付け、活動をして行く。また、これらの活動を通し、市民との交流も考え、水環境、特に下水、水を捨てることへの重要性を訴え、考えて行く。」こととし、この理念を基に活動を展開していきたいと思っています。

関西支部の新役員は次の通りです。委員一同、積極的に取り組んでいきますので、今後皆様のご協力をよろしくお願いします。（は当日出席者）

支部長	木村淳弘	オリジナル設計(株)関西支店
運営委員	池田 勝	月島機械(株)大阪支社
運営委員	加賀山守	都市基盤整備公団
運営委員	勝矢淳雄	京都産業大学
運営委員	斉藤 進	下水道事業団大阪支社
運営委員	中川 広	日本下水道新聞社大阪支社
運営委員	中須賀剛三郎	大阪府
運営委員	森島治雄	(株)大建コンサルタンツ
運営委員	山野寿男	
顧問	稲場紀久雄	大阪経済大学

海外水文化研究分科会から

### 第 3 回の報告と第 4 回のお知らせ

第 3 回の海外水文化研究会が、1 月 31 日、日本下水文化研究会事務所において開催されました。今回は酒井代表による「バングラデシュの水環境リスク」についての現地調査報告でした。

現地調査は、昨年 11 月 22 日から 12 月 1 日に行われ、飲料水の砒素問題、インドによるガンジス川上流のダム建設をめぐる両国の紛争、都市衛生問題などをテーマとして実施されたものです。

6 ページへ

## 多摩源流まつりへのお誘い

5月のゴールデンウィーク、多摩源流の小菅村で例年通り多摩源流まつりが開催されます。小菅村では昨年秋「水と森と食の祭典」が盛大に開催されました。また、水源林を育て、守った“山の御爺”中川金治をしのぶ会を行いました(ふくりゅう29・28号参照)。

本会では、普段の生活の場や手段は違って、水を守るという同じ志をもった地域やグループとの交流を継続していきたいと考えています。そこで、以下の要領で多摩源流祭りへの参加者を募ります。ご家族お揃いで、日本一のお松炊き、真下から見る花火を堪能し、そして東

京の水源(多摩川・水干)を訪ねてみませんか。参加は、会員・非会員を問いません。

記

日時：5月4日～5日(宿泊：小菅村・山水館)

予定：5月4日 多摩源流祭り

(夕方からお松炊き、花火大会)

5月5日 多摩川源流水干までハイキング

参加費(予定)：9,800円(子供7,800円)

集合場所・集合時間は参加希望の方にお知らせいたします。お申し込みは、会事務所まではがき、FAX、e-mailで。多数の参加をお待ちしています。

## 第7回総会のお知らせ

平成15年度総会では、本会評議員の高橋裕先生(国連大学・首席学術顧問)に記念講演をお願い致しました。第3回世界水フォーラムの成果など幅広い視点から、世界の水問題の現状とこれからについて語っていただけると期待しております。また、下記にお示した日程で準備を進めていますので、あらかじめスケジュールなど調整いただければと思います。

日時：5月17日(土)午後1時30分より

場所：日本水道協会7階会議室

## 運営委員会・事務局より

研発の年です：今年は隔年開催の「下水文化研究発表会」の年です。10月・11月ごろ開催の予定です。テーマはまだ未定ですが、文化史、文化活動、文化研究などの研究分野で、多数の投稿をお待ちしています。

し尿研究会が執筆・編集を進めてきた技報堂からの図書のタイトルが「トイレ考尿考察」と決まりました。総会までの刊行(できれば会員配布まで)を目指しています。

☞(5ページから)報告は現地撮影の映像などを提示しながら進められ、参加者は少数にとどまりましたが、活発な質疑もあり、充実した内容の報告会となりました。

なお、発表内容は本会ホームページの「催し等のお知らせ」のなかの第3回例会「記録」にアップしました。是非、目を通してください。本ページの写真も公開しています。

次回・第4回は、2月28日(金)午後6時半から、本会事務所において、椿本運営委員により、USEPA発刊の下記文書の概要報告が行われます。

Guidance on the Privatization of Federally Funded Wastewater Treatment Works

海外水文化研究分科会では、会員、非会員を問わず、海外の水文化について興味のある方にメンバーになっていただきたいと思います。メンバーの間でメーリングリストを作り、情報交換を密にしていきたいと思いません。参加希望者はFAXまたは下記e-mail アドレスまで。ふるってご参加ください。(椿本 祐弘記)

sachihiro@gakushikai.jp

編集後記 ▶下水道博物館についてさまざま議論するなか、私たちが博物館とはと問われても答えに窮してしまいます。いま、さまざまな分野で博物館がどのように変わっているのか、稲村さんにシリーズで紹介していただくことに致しました。お楽しみに。▶本会会員の雨水への関心は下水処理、し尿、汚泥処理などと比べてやや低いのではないかと危惧してきましたが、一昨年多くの方にアンケートへのご協力いただき、杞憂に過ぎなかったと改めて認識しました。定例研究会及び関西での「雨水利用 in 京都」への多くの会員の参加を期待します。▶関西支部の活動の活発化はうれしいことです。関西での参加の機会の第一弾として、大阪市下水道科学館での講演会、「雨水利用 in 京都」を考えていただけたら幸いです。▶大学で査読を頼まれた修士論文のなかに、NPOへの寄付の拡大が財政支出の削減、サービスの効率化、雇用の拡大につながると主張したものがありません。そこまでするには幾多の険しい道のりが必要でしょうが、本会もNPOとして、どういう使命(ミッション)を果たしていくのか、考え始めるべき時期にあると思います。(酒井 彰)



ガンジス川辺の子供たち

## ふくりゅう 通巻30号目次

第11回下水道博物館情報	1
第27回定例研究会案内 世界水フォーラム雨水利用 関連企画	2
第17・18回し尿研究会例会	3
博物館めぐり(第1回)	4
関西支部の動き	5

特定非営利活動法人  
日本下水文化研究会  
〒162-0067 新宿区富久町6-5  
NJS 富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129  
jade@jca.apc.org  
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。  
<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>